

「ロンドンの一ヵ月」補遺

亀淵 迪

伏見先生は、一九六一年十月一日から二十九日までの間、アメリカへのヴィザ待ちのため、ロンドンに滞在された。先生を危険人物視したアメリカ政府が、ヴィザを出し渋っていたからである。本巻所収の「ロンドンの一ヵ月」は、このときの追想を『みすず』三〇六号のために書き下されたものである。当時私は、先生が根拠地とされたロンドン大学インペリアル・カレッジの物理教室（現在はブラケット・ラボラトリと呼ばれている）に在籍中であり、この一ヵ月の間、先生に親しくお付き合い頂いた。先生のエッセイは「内容的順序で記し」てあるが、この小文では、私の知る限りでの先生の行状を、当時の日記をもとに、時間的順序で再現してみたい。

十月十三日（金）晴。午後、研究室へマッシュューズ教授が伏見先生を連れて入ってくる。そのまま、夕方まで先生と駄弁ってしまう。名大にプラズマ研究所を作るため、諸国

の研究事情を視察中との由。五時過ぎ、ラッセル・スクウェアにお帰りになる先生をバス停までお送りする。

十月十五日（日）曇。朝から深い霧。ロンドンもそろそろ冬の気配である。昼近く先生滞在中のタビストップ・ホテルにゆき、一緒にピカデリーに出て中華料理の昼食。食後リーゼント・ストリートをぶらついてからバスで大英博物館へ。古文書、とくにマグナ・カルタやニュートンの手紙（素人が視覚についての論文を送ってきたのに対する返事）などを見る。博物館を出た所で、先生旧知のNHKのA氏に出会い、三人で再びピカデリーにゆき夕食。八時過ぎ地下鉄の駅にて解散。

十月十六日（月）曇。十時頃、研究室に出掛けようとクロムウェル・ロードを歩いていると、エア・ターミナル前で私どものボス、サラム教授に出会う。今晚ブラッセルでオッペンハイマーの講演があるので出掛けるとのこと。昼食後、伏見先生がふらりと研究室に現れる。相談の末、ロンドン北郊のハイゲート墓地へ出掛けることになる。地下鉄で墓地に着いた頃には、空模様が大分怪しくなっている。旧墓地ではファラデイの、新墓地ではマルクスの墓などを見る。前者は、うっかりすると見逃してしまいそうな位に質素なもの。しかし後者は、一寸した記念碑のようで堂々としている。「肝腎なのは、世界を様々に解釈することではなく、世界を変革することである」という意味の言葉が

彫り込んでいる。秋も深まり、辺りは枯葉でいっぱい。帰りはウオタール公園に出てバスに乗る。二階席最前列に坐り、山手のロンドンを高見の見物しながらサウス・ケンジントンへ。イタリー料理の夕食。「最近では日本の物理屋で、欧米に流出したまま帰って来ない人が多いが、これはよろしくない。あなたも早く帰国しなさい」とおっしゃる。八時過ぎ、地下鉄の駅にて別れる。

十月十八日（水）曇。朝、先生が研究室に来られ、「月末までロンドンに居なくてはなるまい」とおっしゃる。都合よくサラムが在室だったので先生に紹介、そのまま一緒にスタッフ食堂にゆき昼食。午後もし引き続き自室で先生と駄弁っていると、教室主任のブラケット先生が入ってきて、「ここにいらしゃったのですか。何か不便なことはありませんか」と、先生に大変気を遣っている様子。私などはブラケット大先生と言葉を交すのは、こういうことでもないとなかなかかなえないのだが。

十月十九日（木）曇。先生のロンドン滞在が長くなりそうなので経費節減のため、カレッジや私の下宿にも近い安宿シェルボーン・ホテルに引越して頂く。二人でホテルを点検したあと中華料理の昼食。一緒にカレッジに帰ったがそのまま再び駄弁り続け。夕食は、先の日曜日に出掛けて休みだったフリート・ストリートのレストラン Ye Olde Cheshire Cheese へ。創業は中世、以後の地盤沈下のため、

現在の地階は昔の一階だったという。先ずビールをとり、名前がよいからと「フエイマス・ブディング」を注文。しかし、隣りで食べているロースト・ビーフが美味しうなのでこれも追加、辛しのホース・ラディッシュがよく合う。一人一ポンド余の豪華ディナーとなったが、今晩は先生のおごり。食後、酔いをさますためホルボーンまで歩き、ここで別れる。

十月二十日(金)曇、雨。朝、グロスター・ロードのいつもの靴屋へ先生の靴を修理にもって行く。午後のお茶は先生とマシューズと三人で、物理教室八階にあるティー・ルームへ。マシューズは「科学者の過剰生産」という問題について、頻りに先生を説得している。

十月二十一日(土)曇。遅い朝食のあと下宿でぼんやりしていると、「散歩の途中寄って見た」と先生が現れる。どんな所に住んでいるのか、の偵察だったらしい。十分ばかりして出てゆかれる。

十月二十二日(日)雨、曇。朝、先生より「昼食を一緒にどうかね」と電話があったので、一時頃先生のホテルに伺う。先生の案内で近くの印度料理店へ。午後はトラファルガー・スクウェアに繰り出し、ナショナル・ギャラリーでビュール・コレクションを見る。日曜のせい、かなり混んでいる。その後ヘイ・マーケットにて少憩。先生は、ギャラリー前で出会った阪大や東大の人達と夕食を共にす

イドパークを散歩。サーペンタイン池に沿い、ビーター・パンの像の所まで足をのばす。ロンドンも天気がよくとかなかなか美しい。

十月二十六日(木)晴、曇、小雨。今日はカレッジのコメレーション・デイ。我々は無料の茶菓が出るパーティに出掛けたが、先生は儀式の方へ。夜は先生とチームズ南岸にあるロイヤル・フエスティバル・ホールのコンサートに出掛ける。チェアリング・クロスで地下鉄を降り、ハンガーフォード・ブリッジを歩いて渡る。橋上から見るチームズの夜景は秀逸、これを先生にお見せしたかったのである。セント・ポールズ寺院や「大ロンドン」市役所などが照明をうけて美しい。コンサートは、サー・エイドリアン・ポルト指揮のロンドン・フィル。曲目はシューマンの「第一交響曲」、ベートーヴェンの「エレジー」、そして休憩後はブラームスの「ドイツ鎮魂曲」。エレジーは弦のみで演奏される五分ばかりの小曲。リリカルで美しい。「ほほう。ベートーヴェンにも、こんな少女的な面があったんですか」と先生。私にもこれは初めての曲、プログラムを見ると「本邦初演」とある。後半のブラームスは、二人の独唱者と合唱が加わる大曲。ポルトの容姿そのままの端正な演奏である。終了後、ホールのバーにて一杯。「人間の声もなかなか美しいものですな」と先生は感に堪えぬ風情。

とのことなので、彼等のホテルまでお送りして別れる。

十月二十三日(月)晴。朝、カレッジへ出掛ける前にケンジントン・ハイ・ストリートに出て、今晚のオールド・ヴィック劇場の切符二枚を購入。午後のお茶は、先生及び同室のチョウダリ博士と三人で八階のティー・ルームへ。珍しく天気がよいので、ヴェランダに出て写真を撮りあう。夕方、先生と早目にカレッジを出て夕食。バスにてオールド・ヴィック劇場へ。中学生くらいの団体が来ていて、ロビーは賑々しい。演し物はシェイクスピアの「十二夜」。ほのかなベールを湛えた春の夜の夢、といった感じの喜劇。十時半に終り地下鉄で帰る。

十月二十四日(火)雨、曇。朝食後、雨の止むのを待っていたが埒があかないので、十一時過ぎカレッジへ。先生よりのメッセージあり。「パーミンガムの中野(藤生)さんがロンドンへ会いに来たいと云っているが、代りにストラトフォードに来てもらっては如何」とある。この木曜日には、先生とストラトフォード・アボン・エヴォンのシェイクスピア記念劇場へ、本場のシェイクスピアを観にゆく計画を立てていたのである。午後、三人分の切符を入手すべくあちこちへ電話してみたが不成功。かくてこの計画はオジャンとなる。

十月二十五日(水)晴。先生、チョウダリと三人で昼食に出たあと、久々の好天気なので、カレッジの向い側のハ

十月二十七日(金)雨、曇、晴。午後のお茶には、先生と、先日ブラーハからやって来たウレラ教授の三人で八階のティー・ルームへ。「モルダウというところ、スメタナが描いたような美しい川を想像なさるかも知れないが、実際は大違い。近頃は方々にダムなど出来てしまっている」といった最新チェコ事情をウレラより聞く。夕食はクインズ・ゲートにて。宿への帰途、「何処かで一杯やりたいですな」とのことなので、近くのエア・ターミナルのバーに落ち込む。「伏見物理学精髄」の講釈をして頂く。「アメリカのヴィザも出て旅程もたった。ヴィタミン剤が余りそうだから上げましよう」とのことなので、先生についてホテルへ。そしてまた、十一時近くまで駄弁ってしまう。

テーマは、「某国政府のビュロクラシー批判」。

十月二十八日(土)晴。久々に好天気。屋近く先生より「パーミンガムから中野さんが着いた。これから二人でそちらに行く」との電話。一時過ぎ両氏が下宿に現れ、直ちにアールス・コートに出て印度料理の昼食。相談の末、グリニッチへ「座標原点」を見にゆくことになる。オールド・スワン・ピアにてチームズ下りの船に乗る。三時発。今日のガイドはコクニーではなくて分り易い。一時間の船旅でグリニッチ着。デッキで風に吹かれていたの、身体はすっかり冷えきっている。公園を抜けて小高い岡に登るとロイヤル・オブザーバトリーがある。本初子午線を示す

白線を踏いたりして記念撮影。初代アストローノマー・ロイヤルだった人の名前のついたフラムステッド・ハウスには、航海用の観測器具など沢山展示してある。これには先生大いに興味を示し、盛んに写真を撮っておられる。岡のグリニッチはフラムステッド・ハウスの本初子午線の標識前に立つ先生。(一九六一年十月二十八日、筆者撮影)



ふもとのレストランにて少憩。帰りはバスに乗り、二階席からテームズ沿いの風景を楽しみながらロンドンへ。レストー・スクウェアにて夕食。先生にはこれがロンドン最後の夜、ブラケット家に招かれているとのことなので、そこへの道順をお教えして別れる。

十月二十九日(日) 晴、薄曇。朝食後シエルボーン・ホテルへ。既に中野さんは来ていて、未だ朝食中の先生を囲んで最後の歓談。食後、タクシーにてヴィクトリア・エア・ターミナルへ。飛行場は霧とかで、空港バスも三十分以上遅れている。その上我々は、今日から冬時間なのに依然夏時間で行動していたので、一層時間の余裕がある。十時十分、漸く先生の便、ニューヨーク行 BA 101 のためのバスが出発。先生より非常に丁寧なお礼をいわれ、恐縮。バスの去った後も、中野さんと二人、しばしそのまま、ぼんやりと立っている。……

(筑波大学教授)

